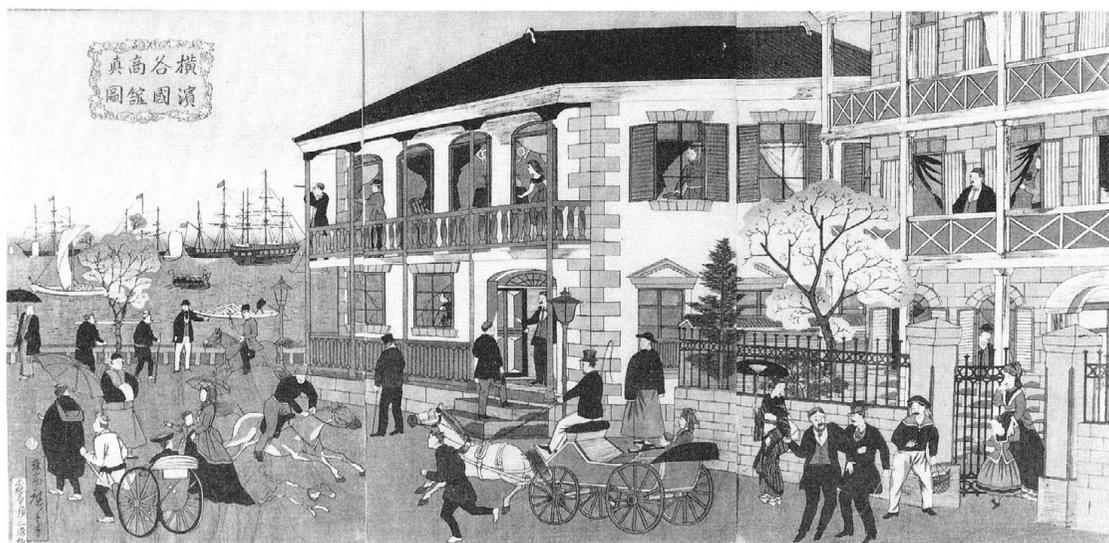


開港のひろば

Number
52

編集・発行/横浜開港資料館(助横浜開港資料普及協会)
発行日/平成8年4月27日(土)

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
印刷/中川印刷株式会社



明治初期の外国商館と海岸通り 歌川広重(3代)画「横浜各国商館真図」(明治5年11月)

都市民衆の手で、木版印刷技術に基づく出版文化が成立したことは、江戸時代の大きな特色である。目的に応じて、さまざまな形態の印刷物が製作されたが、「瓦版」と呼ばれるのは、おもに時事報道を目的とするもので、その指標として①ニュース性、②即製、③無届け出版、④有料といった点が挙げられている。ただし「瓦版」と呼ばれるようになるのは幕末以降のことであり、名称の意味は定かでない。それ以前には、読み上げながら売り歩いたので「読売」と呼ばれることが多かったよう

企画展

瓦版と浮世絵 に見る幕末・明治



浮世絵師の描いた画稿
「横浜渡来之享漏国人拳玉打勝負戯遊之図」
ビリヤードを楽しむ外国人。歌川貞秀画、文久1年(1861)7月。

である。起源も定かでないが、一七世紀後半には存在しており、当初は板木職人の内職のようなものだったらしい。幕末の黒船渡来以降大量に出版されるようになり、戯作者や浮世絵師、絵草紙屋などの版元も関与するようになった。当館では黒船渡来や横浜開港を報じたものを中心に、約三〇〇点ほどを収蔵している。

木版印刷技術はまた、浮世絵と結びついて、江戸時代の代表的な大衆芸術の一つである錦絵を生み出した。浮世絵とは、都市民衆を担い手とし、彼らにとって関心の対象となった社会(「浮世」)の諸事象を描いたもので、作品が商品として流布した点に特色がある。したがって、それが木版印刷技術と結び付いたのは自然なことであった。墨摺に始まり、筆彩を経て、多数の色を重ねる版彩色に進んだものを錦絵という。

その重要な属性として、因習に捉われない自由な作画態度と写実性、購買者の多様な関心に応ずる柔軟性をも指摘できる。成立の当初から中国版画やオランダ伝来の西洋画の影響を受け、その画法を消化しているのも、その点と関わっている。開港後、横浜の町並や外国人の風俗が取り上げられ、いわゆる「横浜浮世絵」が大量に製作されたのも、そうした属性から見て自然なことであった。当館では、これら横浜浮世絵や明治初期の「開化絵」を中心に、約八〇〇点ほどを収蔵している。

(斎藤多喜大)

開国・開港のシナリオ

—「異国渡来年代誌」から—

「異国渡来年代誌」(以下「年代誌」と略)という仮綴タイプの瓦版がある。「北亞墨利加合衆国」など条約締結五か国の説明があり、末尾の二丁に、寛永元年(一六二四)以降の外国や異民族との接触の記載に続いて、やや詳しく黒船渡来に触れ、開港で締めくくる記述がある。これをごく簡略にしたものが、安政六年初頭から出回りはじめる「御貿易場」瓦版に収録されていることからみて、五年末頃に出版されたものと思われる。また、この事実から、当時かなり広く流布したものであることがわかる。全文を紹介する紙数がないので、ペリー艦隊の来航以後の部分について、要点のみ記し、開国から開港に至る過程についての、当時のいわば「表向き」のシナリオがどのようなものだったか、紹介してみよう。

黒船渡来

まず、嘉永六年(一八五三)の第一回目のペリー来航の動機について、「年代誌」は「大日本国の繁昌ゆたかなる事をしたひ奉、神国皇帝殿下に願書を捧奉、食料并二石炭をこひ、且通信の事を願」というように記す。そのうえで、翌年の第二回目の来航のポイントを次のようにまとめている。

①「伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総の国々へ諸大名様方五十余頭、海岸御かため仰付らる。其有様花々敷もいさまし」

②「此時同所(神奈川)横浜へ上り、

持渡る所の遊山屋形車船を献上す。これハ其工夫蒸気船の如くにして火を焚、其火勢によつて自然と陸地をはしるゆへ蒸気車といふ。此外献上あまたなり。こゝにおひて御たいだん所御取立あつて山海の珍味御馳走仰付られ、(中略)又同所におひて御手あてとして米五百俵を力量すぐれし角力取に命じ、これを持はこばせ、さまざまの曲もちいたしければ、異人等おどろきかんじ入り、御礼申上帰帆す」

①に対応するのが、当時夥しく出版された「御固」瓦版であり、②に対応するのが、「献上品」や応接の模様を報じた瓦版である。これらに貫く基調は、「神国日本」の武威と繁盛であり、外国が臣下の礼を取って「入貢」するというイメージである。それは鎖国の下での朝鮮・琉球との「通信」(国書の授受)や長崎でのオランダ・中国との「通商」に関する日本側に都合の良い解釈を、そのままアメリカにも投影したものであり、鎖国の建前と矛盾しない開国の論理であった。

通商条約の締結と横浜開港

「年代誌」はさらに続けて、安政四年(一八五七)のアメリカ総領事ハリスの江戸出府について、次のように記す。

「此みぎり有がたくも東都柳宮登城拜礼仰付られ、且また御府内はんくわの地拝見いたし度旨願によつて、これをゆるす。まづ兩國回向院にて

大角力けんぶつし、(中略)ちんぶつ等所々ミせ物いたし、よろこびて帰帆におよぶ」

ついで、各国との通商条約の締結に触れて、「同(安政)五年五月、ヨロシヤ・イギリス・フランス、右三ヶ国の異国せん品川沖へ渡来す。此おりからハ御府内諸方拝見御免仰付られ、(中略)名高き浅草観世音へ参詣し、それより隅田川の名所旧跡をたづね、王子いなり・飛鳥山辺、其外神社・仏閣をおがみ、猶又買物等いたし帰帆す」と記す。

そして、末尾を次のように締めくくっている。

「同六未年正月、アメリカ・コロシヤ・イギリス・フランス・ラランダ、右五ヶ国へ貿易御免仰付られ、神奈川横浜村・肥前長崎・奥州箱根右三ヶ所へ交易場御取立に相成候事、莫大の御仁心、益日本国万代不易吉祥繁栄日々に盛也」

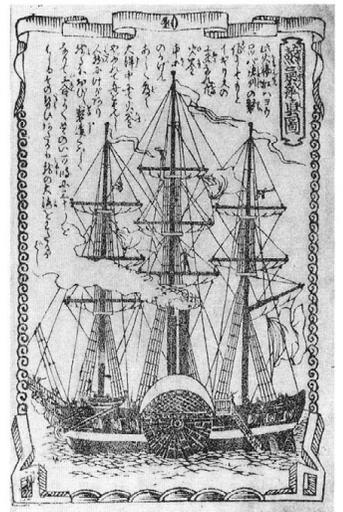
開港は日本の繁栄を慕ってやってきた諸外国に対して、「御仁心」から願いを特別に許したもので、しかも交易によつて日本はますます繁栄するだろうというのである。これがいわば幕府公認の開国・開港のシナリオだったのではないだろうか。このシナリオに準拠していれば、瓦版にせよ浮世絵にせよ、弾圧される心配はなく、大量に出版することができたという意味では、権力側と出版界の共同利益に基づくシナリオだといえる。

横浜浮世絵の世界

「年代誌」の論理はそのまま横浜浮世絵の出版理念に通ずる。幕末浮世絵界の代表的な絵師にして横浜浮世絵の第一人者、五雲亭貞秀はその画業の集大成ともいえるべき「横浜開港見聞誌」初篇(文久二年)の序文で次のように述べている。

「四方の波しづかにして、土農工商万歳をしゆくして、民のかまどハ煙り高く立登り、南は長崎、北は蝦夷・唐太・千島に至るまで、人心異る事なく、然もつよし。是を異州へも聞へありて、我日本の勢能をしたひ来る亜墨利加国一将ベルリといふ者の願ひに御免ありて、江府の南海中横浜でふ所に新に港開ありて、中央に運上所を建玉ひ、西の方に我國の商家をつらね、これを本町と云東の方につゞきて異人商館を立させ玉ひ、万里の波上を越へ積来る産物を又我國の産に交易のにぎハひ、銀銭の売上げ数百万の商ひ、おのづから民の幸、民のよろこびとハ成ぬべし」

このような観点から新開港場の繁栄の様子を描いたのが、横浜浮世絵に他ならない。もちろん江戸の錦絵問屋の立場からすれば、外国人の新奇な風俗を始めとする横浜の珍しい風物に対する大衆の関心が高いことを見込んでの大量出版でもあった。同じく貞秀の万延年の作品「横浜土産」に対する仮名垣魯文の序は、明快に次のように記している。



「異国渡来年代誌」の一部「蒸気船真図」内容は黒船渡来時に流布した瓦版と同様で、「あたかも竜の大海をわたるがごとし」などという説明文が添えられている。



アメリカからの「献上之品物」と応接風景を描いた瓦版「亜墨利加蒸気車・力士力競」上は「遊山屋形船」こと蒸気車、下は力士による「御手あて」の米俵の曲持ち。安政1年(1854)2月頃。



「蛮国人物図繪 英吉利人」歌川芳艶画、文久1年1月。左上は仮名垣魯文の歌「いく千さと海路へたてゝすむ人も我神風に吹なむくめり」。横浜浮世絵の出版理念をよく表している。

「実地を踏で勝景を眺望は一本の杖にあり、居ながらにして名所を知ること一書の図会に不如、画工玉蘭齋主人、こたび南島を歴して繁昌の港を画き、号て横浜土産と称す、未だ見ぬ人の枝折にせんとの例の婆心ならんかし」

シナリオの虚構性

しかし、現在の目で見れば誰にも明らかなように、「年代誌」が記し、横浜浮世絵がそれに依拠したようなシナリオは虚構にすぎなかった。そもそも朝鮮・琉球の通信使がそうでなかったのと同じように、幕末に外国船が渡来したのは、日本の繁栄を慕うてのことではなかった。彼らは日本の武威を恐れなかったばかりか、開国・開港の要求を拒否できなかったこと自体、幕府の武威の失墜を意味するという見方もあった。後者の見方が過激になると、いわゆる尊皇攘夷思想が登場する。開港によって利益を得たのは一部の商人であり、民衆の間には物価騰貴などによる生活苦を開港と結びつける見方も存在した。公認のシナリオに対するこれらのアンチ・テーゼは、「風刺物」の瓦版に多少は反響しているが、あからさまな主張は、落書・落首などと呼ばれる文字どおり非合法の意思伝達手段によらなければならなかったことであろう。桜木章「側面観幕末史・一」(続日本史籍協会叢書、三〇九〜一〇頁)が伝える「桜田の紅雪(あへこ部文句チヨボクレ)」

は、公認のシナリオの虚構性を白日の下に曝した万延元年(一八六〇)三月の桜田門外の変の直後に出回ったものと思われるが、次のように断じている。

「交易始り諸色か不足で、何でも高直、お米か五合で、お芋か百文、糸類高くて、お武家が安くて、武芸が捨つて、博奕と辻切、無闇に流行つて、今にも邪宗になるかもしれねえ」

ここには公認のシナリオに対する辛辣な批判が見られるけれども、前提にあるのは、貿易は不要であり、武威によって邪宗を広める外国から遮断されている鎖国状態を良しとする、きわめて保守的な観念である。しかし、これとは別に、新しい現実を見据えながら、真の開国を模索する思想も芽生えつつあった。最後にその幾つかを紹介しておこう。

開国への道

伊勢松阪郊外の商人にして学者であった竹川竹斎は、安政六年八月二一日の日記に、横浜で起きたロシア士官殺害事件に関連して、次のように記している。

「兵端は武士夷ヲ切候より兪候ハ、却てよし、武士ハ切ものト外夷心得候ハ、先は平等之和平ニ可成、是戦ヲ以和ヲ議スル也、如是迄ニては、全城下之盟、国恥故夷ニ被蔑候也、金銀始一切外夷持行、我国之品倍ニも三倍ニも登貴候、此昇価ニて我国人之困シミは十年、外夷へ出候ハ、又国可富、国富は兵威も盛となす

ことやすく、兵盛ニならハ国は益無窮ニ泰平なるへし」(竹川欽也氏所蔵「竹川竹斎日記」より)

一方で、単なる排外主義ではなく、強兵による「平等之和平」を求め、他方で貿易を不可欠の構成要素とする富国策を提言している。物価騰貴が生産を刺激し、輸出を促進するという論理のもう一面には、輸入によって物価を下げられるという論理も用意されていた。

また群馬の豪農出身の学者、堀口貞明は万延元年二月の「国益弁」の中で、「方今国益を議せんとするには、都下の遊民を減ずるに若かず。幸にして今外国貿易物価騰貴し、金銀多くして標賤す。此の時に当ってや農民時を得し故に、令論厚ければ人々農に就くべし。工も利を得る厚き故に業を励むべし。加うるに外国奇巧の器械船艦等を製すべきの所置あらば、珍奇簡便の器も他に求めずして成るべし。(中略)四民その業に就いて、各々その用足り、加之富商に令して大艦を造らしめ、外国に行きて貿易すべきの所置あらば、則ち富国強兵となるべし。是之れを国益というべきか」と述べている(阿部征寛「堀口貞明の思想と行動」『横浜開港資料館紀要』第八号、一七〜一八頁)。

これらの記述を熟読玩味すれば、新しい時代がもうすぐそこまで来ていること、そのためのシナリオも練られていたことを理解することができよう。(斎藤多喜夫)

横浜の茶貿易商 R. M. ヴァーナム

ヴァーナム R. M. Varnum は、明治初期から大正のはじめまで四五十年間横浜に住んでいた茶貿易商である。引退後、友人に勧められて自伝をまとめ私家版として印刷した。その *Memo of Life at Sea and in the Far East* (航海と極東の生活の覚書) と題した本を子孫から見せていただく機会があったので、事実関係を他の資料でおきないつつ人生をたどってみよう。伝記は横浜のボックス・オブ・キュリオス社に印刷させたもので、序文は一九一八年一月付である。

若き冒険の日々

ヴァーナムは一八四四年頃、アメリカのニューイングランドに生まれた。母方の祖先は二六二〇年にメイフラワー号でアメリカに渡った清教徒であり、父方の祖先もその一六六後にアメリカに渡ったという古い家系であった。その子孫はアメリカ独立戦争で戦い、建国の動乱の時代を生きた。ヴァーナムはこうした祖先から冒険心をうけつぎ、少年のころから雄飛を夢見ていたという。

一八六一年に南北戦争が起きたとき、ヴァーナムは一七歳の学生だったが、偽名で北軍に入隊していたのを父親に見つけられ、東インド行きの備船に船員として乗せられてしまう。その後一年におよぶ船乗り生活の始まりであった。

世界を股にかける航海の現場で船乗りの訓練を積んだヴァーナムは、二二歳になったばかりの若さで一等

航海士となった。船乗りとしての将来に自信を得たヴァーナムは、一四歳のときの恋人であったタイラー嬢とニューヨークで結婚し(一八六七年か)、ボストンに短い新婚旅行に出かけた。

その後も、バラグアイと交戦中のブラジル軍に四ヵ月間従軍するといった冒険をまじえつつ、ベイルト、ニュージールランド、香港、サイゴンと備船の航海がつづいた。サイゴンから米を積んで横浜に着いたのが一八六九年(明治一)七月のことで、これが初めての日本だった。このときの備船主がウォルシュ・ホール商会で、その経営者の夫人がヴァーナムの旧友だったことが、のちにヴァーナムの人生を変えることになる。



晩年のヴァーナム(Memo of Life at Sea and in the Far Eastより)

横浜へ

数年後——一八七二年(明治五)のことと思われる——旧知の船長から日本で汽船に乗務しないかとの話をうけたヴァーナムは、サンフランシスコへ向かい、そこから太平洋郵船の乗客となった。ジャパン・ウィークリー・マイル紙の船舶欄によれば、一八七二年四月五日にサンフランシ

スコを出港し、五月一日に横浜に着いたグレート・リパブリック号の乗客のなかにヴァーナムの名を見いだすことができる。

ヴァーナムは、ウォルシュ・ホール商会のエド号をマニラまで運航する仕事を引き受けたが、同船の艦装にしばらく時間がかかることになった。その作業の合間をぬって、東京の友人(開拓使顧問のケプロンと推測される)を人力車で訪ねたり、品川・横浜間の鉄道の試運転に乗ったり、開業式を見物したりしている。

約一ヵ月後、エド号の艦装がようやく完了したとき、ヴァーナムはジョン・ウォルシュから思いがけない申し出をうける。ヴァーナムの働きぶりを見ていたウォルシュが、ウォルシュ・ホール商会の茶再製場の監督を引き受けないかと声をかけたのである。年俸一八〇〇ドルに食住付きであった。ヴァーナムはこの話に飛びついた。この日を最後にヴァーナムは船乗り生活から足を洗い、四五年来にわたる陸の生活に踏み出すことになった。二八歳のころであった。

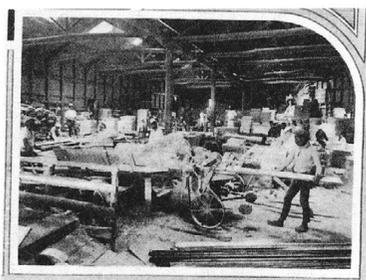
ウォルシュ・ホール商会

茶は、明治中期まで生糸につぐ重要な輸出品であったが、その輸出の大部分は外国商人がおさえていた。ウォルシュ・ホール商会も有力な茶貿易商のひとつで、こうした外商は、売込商から仕入れた茶を輸出用に再製する工場を早くから設けていた。工場の中には炉がずらりと並び、

そのうえにナベをかけて、女工たちが汗びっしょりになって茶をほうじていたという。この「お茶場」とよばれた再製場は居留地(山下町)一帯に散在し、独特の情景を呈していたという(毎日新聞横浜支局編『横浜今昔』、当館編『横浜商人とその時代』)。

ヴァーナムが監督することになった再製場・梱包場は大規模なもので、一二五人の工員、二〇〇〜二五〇〇人の日雇いの工員(ほとんど女工)が働いていた。その上に六人の親方がいて、かれらは多少なりとも英語を話したという。

ウォルシュがヴァーナムに期待したのは、この工場の規律をたたすことであった。ヴァーナムは、規律違反には厳しくのぞむ一方で、苛酷な体罰をやめるなど次第に現場を掌握していった。同時に茶の再製の仕事を一から学んでいった。当時、ウォルシュ・ホール商会の再製場では、一日二時間労働で、賃金は天保銭



ヴァーナム・アーノルド商会の木箱製造場 (Present-Day Impressions of Japan, 1919より)



執務中のヴァーナム(手前)とアーノルド
(Present-Day Impressions of Japan, 1919より)

八枚の安さだった。賃金は毎日出入り口の門のところで支払われ、同時に茶を持ち出さないようにチェックしたという。

ヴァーナムがウォルシュ・ホール商会で働きはじめたころ、同商会の茶質鑑定人がやめたがっており、ヴァーナムを鍛えることになった。茶質の鑑定は習いさえすれば誰でもできるというものではないが、幸運なことにヴァーナムには素質があり、急速に習熟していった。そして(おそらく一八七三年の)茶のシーズンが始まる五月には、厳しい審査に合格して資格を得ることができた。

そのころ、ヴァーナムは、茶のシーズンオフに茶箱の内張りを再製場の工員にやらせることを思いつき、自ら実践してみた。これはかれらの反発を招き、ストライキ騒ぎにまで発展したが、結局ヴァーナムの信念が通った。その後もヴァーナムは、新しい工夫やアイデアを導入していく。

フレージャー・ファーレー・ヴァーナム商会の設立

一八七四年のはじめにはヴァーナムは妻と娘をアメリカから呼び寄せることができた。ヴァーナムは今度は茶の再製の機械化に取り組んでいく。機械の開発には資金と技術が必要であったが、この問題で経営陣と意見があわなくなり、ヴァーナムはフレージャー・ファーレー商会に開発計画をもちかけた。結局、同商会が

ヴァーナムの提案に同意したので、ヴァーナムは残念ながらウォルシュ・ホール商会を去り、J・A・フレージャー(イギリス人)、G・ファーレー・ジュニアの二人とパートナーを組んで、フレージャー・ファーレー・ヴァーナム商会を設立し、イギリス領事館に登録した。これが一八八二、三年(明治一五、六)のことで、以後約二〇年間、同じメンバーで仲良く事業をつづけることになった(居留地二一六番に事務所、一四三番が工場・倉庫。現在の中華街の善隣門付近)。

再製機の開発と設置は大事業だった。レンガ造りの工場の設計に三ヵ月かかり、その後サンフランシスコに赴いて機械の製作に立ち合った。機械を横浜へ運んだ後、工場を組み立てるのに一ヵ月半を要したという。ヴァーナムはほとんど工場に泊込みで働いた。トラブルもあったが、ついに成功し、事業も軌道にのっていった。一八八五、九九年の同商会の茶の買付高は、横浜の外商の上位四、一〇位あたりにつけている(『横浜市史』四巻上)。

商会の設立から三年、ヴァーナムは新たな事業に乗り出した。茶箱代



フレージャー・ファーレー・ヴァーナム商会の茶商標(当館蔵)

が高いのを目をつけたヴァーナムは、木箱製造機械を輸入して工場を設置し(居留地二一八番)、のちには一年に一〇〇万箱も外国へ輸出するまでになる。

ヴァーナム・アーノルド商会

しかし、改正条約が施行され居留地も撤廃された一八九九年頃、パートナーの引退や死亡でフレージャー・ヴァーナム・ヴァーナム商会は解散に追い込まれた。ヴァーナムは、長年経理を担当していたH・M・アーノルドとパートナーを組んで、ヴァーナム・アーノルド商会を設立し、木箱の製造・輸出を専門にすることにした。以来事業は順調に発展した。

新会社設立の一方で、ヴァーナムはG・H・メーシー商会から茶買付けのポストを提示され、引き受けることになった。同商会は、ニューヨークのカーター・メーシー商会を本店とする茶貿易商で、最初神戸に支店を設けていたが、数年前に横浜に進出してきていたのである。ディレクターの一九〇〇年版をみると、フレージャー・ヴァーナム・ヴァーナム商会とメーシー商会が同番地になっている。事実上立ちゆかなくなっていたフレージャー・ヴァーナム・ヴァーナム商会の地所にすでにメーシー商会が移転してきており、再製場などの設備をそのまま引き継いだものと推測される。メーシー商会は、一九〇二年には製茶買付けで横浜外商の首位をしめるなど、大規模な取引を展

開した(『市史』四巻上)。

一九〇四年頃、同商会の茶鑑定人が急死し、ヴァーナムが急遽あとを引き受けることになって神戸に赴任した。約一年半後には妻も呼んで、約一〇年間、茶のシーズンは神戸で過ごした。

横浜の輸出製茶市場では、一九〇〇年代には入荷の七、八パーセントを静岡からの出荷に依存するようになっていたが、日露戦争後には清水港からの輸出が急増する。横浜や神戸の外商が静岡へ出店し、そこで輸出業務を行なうようになったのである(『市史』四巻上)。メーシー商会も一九一二年の冬に静岡に進出し、ヴァーナムも静岡に赴任した。

翌一九一三年、ヴァーナムの妻が病にたおれ、ヴァーナムは毎週末、汽車で六時間かけて横浜へ帰る生活となったが、夫人はついに五月に他界した。葬儀はウェストン師(日本アブルス紹介で知られる)によって行なわれ、山手の外国人墓地に葬られた。

翌一九一四年、ヴァーナムは来日以來四二年間つづけてきた茶貿易から引退し、静岡にも別れをつづけた。横浜の製茶貿易の盛衰とともに歩んだ年月であった。その後、一八一八年頃離日し、ヴァーナム・アーノルド商会はアーノルドに委ねられた。末筆ながら、ヴァーナムの自伝を利用し、ここに掲載することを許可してくださったウィルシャー氏(カリフォルニア)にお礼申し上げます。(伊藤久子)

明治中期の茂木商店員

勝野家所蔵の写真から

横浜の生糸商が、近代日本の輸出の大宗であった生糸貿易の重要な担い手であったことは、周知のことからである。しかし意外とその実態を伝えてくれる史料は乏しい。それは生糸商自体が浮沈の激しい経営であったことともに、かれらが軒をつらねた横浜の中心部が、関東大震災や戦災・占領接収などの災禍にあつて、いることにも大きな理由がある。

そのようなことから、横浜生糸商の史料は横浜中心部からでなく、かえって地方からえられる場合が少なくない。幕末・明治前期の生糸商のなかには産地から横浜に進出した者もおり、地方の荷主と緊密に連絡をとり、また実際に店員を派遣して生糸を集荷した。これまで生糸商として経営の実態が判明する吉村屋幸兵衛や甲州屋忠右衛門の資料は、出身地にあてた書状などを中心とするものである。

先に「明治中期の茂木商店」と題し、原商店とならぶ有力生糸商であった茂木商店の実質的な二代目である二代茂木保平（泰次郎・名古屋の有力服商瀧定助次男）の、実兄瀧正太郎あて書簡を紹介して、明治中期の茂木商店の経営を紹介したことがある（『開港のひろば』第四四号一九九四年五月）。今回は新たに岐阜県中津川市の勝野正彦家で発見された二枚の写真から「明治中期の茂木商店員」についてみてみよう。

二枚の写真の年代を確定する鍵は、この場面に登場する勝野又三郎（慶

応元年・一八六五）大正一二年・一九二三）である。又三郎は中津川の器械製糸家勝野吉兵衛の三男（早世した兄を含めると四男）として生まれ、明治一八年（一八八五）二〇才で茂木商店に入店、書記方・電報方・倉庫方をへて、入店一年目の明治二九年には売込部生糸課副長の職についた。明治三五年（一九〇二）、三七才のとき、兄の死去に際して又三郎は茂木を辞して故郷に帰り、家業の勝野商店信勝社製糸場の経営にあたり、全国屈指の規模に拡大した。茂木商店の後身である茂木合名会社が、大正九年（一九二〇）の恐慌で瓦解すると、失意の又三郎は健康を害し、大正一二年（一九二三）九月、関東大震災のショックもあり、療養中の東京で客死した。享年五七才。

写真1は、又三郎が茂木商店入店間もない、明治二〇年ごろのものと思われる（前列左から二人目）。着馴れぬ羽織姿が初々しい一枚である。他の者の名前は一切わからない。後列左の三人は洋服姿である。

写真2は、茂木商店員の集合写真である。横浜生糸商の店員がこのように集まったものは管見のかぎりではないが、総勢五七名がおさまっている。場所は茂木商店の中庭、向背の鉄扉をもつ煉瓦の壁は、生糸倉庫と思われる。服装から想像して冬期に撮影したものであろう。

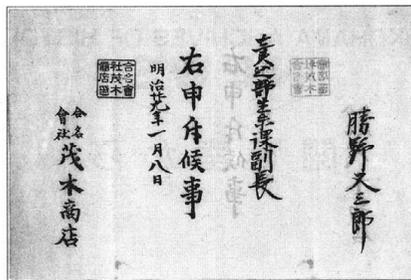
写真1で紹介した勝野又三郎は、四列目の中心（左から七番目）にいる。その頭には白髪が混じり、もと



写真1 明治20年ごろの茂木商店員

もと端正な面差しに精悍さが加わっている。二列目中央が、二代茂木保平であり、保平が肩に手を添えた子供が、のちに茂木商店を茂木合名会社に組織替えし、総合商社化をはかって、大正九年の恐慌で倒産させるにいたった茂木良太郎（のちの三代惣兵衛）である。この写真の年代確定は、又三郎が明治三五年四月に商店を離れることを下限として、上限は明治二六年生まれの良太郎の年令を何才に見積もるかで決まる。良太郎は座っているので身長がわからないが、七才と仮定すれば、明治三三年である。したがってこの写真は明治三四年前後のものといえよう。又三郎三十代なかばの写真である。

写真2からは当時の茂木商店員の有様がみとれる。服装については、茂木保平の左右・後列は黒系の羽織



勝野又三郎を売込部生糸課副長に任ずる
辞令
(明治29年1月8日 勝野正彦家所蔵)

姿（一部紋付）である。対して第一列と右翼・左翼は薄色の和服であるが、これらは入店後日の浅い者、「丁稚」・「小僧」と呼ばれる若者であろう。そのなかで最前列の者のほとんどと、右翼・左翼の者は一部が羽織を着している。また羽織を着さない者は頭髪を丸刈りにしている。さらに第五列・六列には十一人の洋服姿の者が見受けられる。判明するかぎりでダブルの背広である。洋服姿の者は、生糸など外国商人との取引にあたる者と思われる。

茂木商店の場合、初代惣兵衛（隠居後、初代保平）の時代には、すでに蚕糸類のほか葉種や海産物の売込、金巾などの綿織物の引取、呉服店の経営も行っており、明治二十七年の惣兵衛の死去により店を継承した二代保平は、茂木銀行を設立し、羽二重などの絹織物輸出にも力を注ぎ、不動産経営にも進出した。写真2の明治三〇年代半ばは、保平はなお三〇才になったばかりの青年でありながら、茂木商店という大店の経営のさらなる多角化をはかっている時期である。当時の茂木商店の機構について明らかにしてくれる資料はないが、明治二〇年代の資料では売込方・倉庫方・簿記方・出納方・為替方などの店内業務や賄方・給仕・雑務など多様な仕事もあり、和服の者はそのような仕事にあたる者が多く含まれるよう。いずれにせよこの写真からうける印象は、服装や頭髪にみられるような、個人商店としての店内序列

に表現された旧いたたずまいである。

次に、写真1と写真2との関係である。写真1の前列七人をA〜G、後列六人をH〜Mとしよう。これを写真2と照合すると、A不明、B四列左から七番め（勝野又三郎）、B・C不明、E五列四番目、F二列三番目、G四列四番目、H五列六番目、I五列二番目、J四列六番目、K四列九番目、L三列七番目、M五列八番目、となる。すなわち写真1に写された一三人のうち、一五年後の写真2に一〇人が残り、そしてそのうち六人が洋服姿である。大正・昭和前期には、大正九年の恐慌や関東大震災、昭和恐慌で伝統的な生糸商が打撃をうけ、そのなかから、荷主を引き連れて独立する者が多く出てくるが、明治中期の二枚の写真の照合関係からうかがうかぎり、当時の茂木商店員の定着度は高かったように思われる（それも現在のところは推測の域にとどまらざるをえない）。今後とも多くの資料・写真を発掘して横浜生糸商の実態解明に資したいと考える。（平野正裕）



写真2 明治34年ごろの茂木商店員

閲覧室から

横浜開港資料館所蔵
聖書及び注釈書(1)

今回から数回にわたって、当館で所蔵している聖書及び注釈書を紹介します。請求番号は「」で示しましたので、閲覧室でご覧ください。

約翰伝 新約聖書

「ヘボン・ブラウン訳」〔明治五(一八七二)年〕和装 整版 23cm 一冊(88丁) 書名は題簽による
巻頭「新約聖書卷之四約翰伝福音書」 [193.6-1]

路加伝 新約聖書

「クボン訳」〔横浜〕〔米國聖書會社〕〔明治八(一八七五)年〕和装 整版18cm 一冊(100丁) 書名は題簽による 巻頭「新約聖書卷之三路加伝福音書」 [193.6-2]

谷雅之書

「トウン訳」〔横浜〕 Mission Printing Press 明治八(一八七五)年 18cm 一冊(24P) 英文書名 “the Epistle of James” [193.7-1]

辺天呂乃不美

「ブラウン訳」〔横浜〕〔バイブル・プレス〕 明治九(一八七六)年 18cm 一冊(41P) 英文書名 “the Epistle of Peter” [193.7-2]

与波子登由多

「ブラウン訳」〔横浜〕 (Bible Translation Society) 明治九(一八七六)年 18cm 一冊(39P) 英文

書名 “the Epistle of John and Jude” [193.7-3]

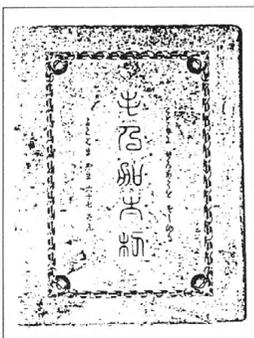
希伯來書 新約聖書

翻訳委員社中訳 〔横浜〕 北英國聖書會社 明治九(一八七六)年 和装 整版 22cm 一冊(31丁) [193.7-4]

糸すきりすとの志しやばうろ天左呂 尼加乃きやつかいにおくれるふみ

「ブラウン訳」 〔横浜〕 (A.M.B.A.P. Free Mission Society) 明治一〇(一八七七)年 18cm 一冊(26P) 英文書名 “Paul’s Epistles to the Thesalonians” [193.7-5]

太利 〔ブラウン訳〕 〔横浜〕 Mission Press 明治一〇(一八七七)年 15cm 一冊(12P) 英文書名 “Juvenile Tracts in Japanese” [193.6-10]



加拉太書 新約聖書

翻訳委員社中訳 〔横浜〕 米國聖書會社 明治一〇(一八七七)年 和装 整版 22cm 一冊(16丁) [193.7-6]

(石崎康子)

資料館
だより

▼展示

(1)「瓦版と浮世絵に見る幕末・明治」 4/27(土)~7/28(日) 当館所蔵の瓦版、浮世絵を紹介しつつ、開国・開港期から明治初期にかけての日本と横浜の歴史をたどる。

(2)「世界旅行と横浜」(仮題) 7/31(木)~10/27(日) 19世紀後期は世界一周旅行の流行期であり、横浜はその一中心であった。旅行記や写真集を素材にその様相を紹介する。

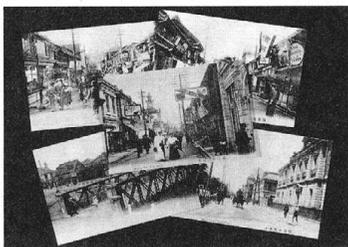
(3)「幕末・明治-豪農の軌跡」(仮題) 10/30(木)~2/2(日) 市内の農漁村に生まれ、石鹼製造の元祖となった堤磯右衛門の生涯を通して、幕末明治期に豪農の果たした役割を探る。

(4)「絵葉書に見る明治・大正期の世界と横浜」(仮題) 2/5(木)~4/20(日) 当館所蔵大塚文庫の絵葉書コレクションにより、横浜を中心として世界に広がるコミュニケーションの様相を復元する。

▼寄贈資料

(1) 内田隆三稿「大正拾五年 雑記控 内田」(演説・講演草稿)ほか 4点(戸塚区戸塚町 内田泰三氏)

(2) 関東大震災画報 第2輯(大正12年10月1日 大阪毎日新聞社編・刊) 1点



着色絵はがき「明治大正初期の横浜の街並み」 5枚1組400円 当館・受付で販売。

(西区平沼 山崎日出樹氏)

(3) 慶応四年三月の太政官高札 3点(川崎市宮前区土橋 内田清一氏)

(4)『土地宝典 横浜市街地全図』(明治39年12月発行 南中舎版) 1点(神奈川県栄町 鈴木昭正氏・鈴木悌正氏)

(5) 横浜の遊郭に関する資料 25点(前

橋市城東町 中村数男氏)

(6) 絵葉書 1,169点(竜ヶ崎市松葉河本創作氏)

(7)『読売新聞』(昭和7年2月14日付号)ほか 7点(港北区大曾根台 三澤義人氏)

▼人事異動

常任理事・館長 安田岩男(4月1日付)

閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、下記の期間閲覧室を休室とします。

平成8年6月25日(火)~28日(金)、平成9年2月25日(火)~28日(金)

また月末整理日のため、下記の日も閲覧室は休室になります。

平成8年5月31日(金)、7月31日(水)、10月31日(木)、平成9年1月31日(金)

なお収蔵庫の燻蒸のため、5月8日(水)は休室とします。

ご理解とご協力を、よろしくお願いたします。